

## 第5回母子健康手帳等に関する意見を聴く会 議事概要

### 1. 日時

令和3年12月21日（火）15時00分～17時00分

### 2. 場所

厚生労働省子ども家庭局小会議室（オンライン）

### 3. 出席者

第1回から第4回の母子健康手帳に関する意見を聴く会の参加者

### 4. 進行内容

（1）事務局から母子健康手帳等に関する意見を聴く会の主な意見（案）について説明

（2）意見交換

出席者からの主な意見は以下の通り。

#### 1) 厚生労働省職員とモニターアンケート結果について

○母子健康手帳の交付手続きはオンラインがよいという回答が多かったことについて、手帳交付の際に面接を行っている側面を考えると、利便性だけをみてオンラインがよいと判断するのは難しい面もある。

○乳幼児健康診査は個別受診がよいという意見が多かったことについて

- ・健診が有給対応可能になれば、個別健診を好む結果が変わるのではないか。母子健康手帳の交付を1か所でまとめて行い、その際に、面談を行いタクシー券もつけている市もある。住民の気持ちと政策をうまく組み合わせ実施できるとよい。
- ・保護者が平日に休みを取ることが困難なので、好きなときに予約して受診できる個別健診を希望していることが考えられる。
- ・コロナ禍での調査のためバイアスがかかっているのではないか。集団のメリットとして、同年代の子供たちの様子が見られることもあるので、過去のデータがあれば、コロナの影響について言えるのではないか。
- ・集団健診は、友達づくりや地域とのつながりができるというメリットがある。保護者が普段意識することはなくても、このような潜在的なニーズはあると思う。その辺りがアンケートには表れていない。アンケートの結果だけを見て、そのニーズが高いから個別健診に動くということではなく、集団で実施するメリットも考えていく必要がある。

○モニター調査からは、子供が生まれる前に育児方法について知っておいたほうが安心だ

ということが言えるのではないか。それも報告書に入れて欲しい。

## 2) 母子健康手帳等に関する意見を聴く会の主な意見（案）について

### ○母子健康手帳の名称について

- ・この手帳は誰のものかについて、厚生労働省職員とモニターアンケート結果では、1位が家族のもの、2位が子供のものだった。意見を聴く会では、父親が蚊帳の外になっているという議論があったが、当事者は家族のものだと意識している。この点を報告書の中に盛り込んでいただくとよい。
- ・この10年の間に、母子健康手帳に「親子手帳」という名称を併記している自治体が増えてきている。そういう情報も盛り込んでいただきたい。
- ・小牧市では以前から「親子健康手帳」という名称を使っている。親と子が健やかに育み合う、親と子の健康を守っていくための手帳ということでその名称を使っている。「親子手帳」という名称には「健康」という文字が抜けている。母子健康手帳の検討会では、「健康」という言葉の意味も併せて検討していただきたい。
- ・「母子健康手帳」の「母子」が「親子」に変わったとしても、「健康」の部分は大事。健康であることの権利保障を国と自治体が行い、市民も見守りつつ、それを育て展開していくことが重要。
- ・「ペアレントクラシー」は、親中心の、親の責務を強調する考え方で、社会がどんな状況でも子供がちゃんと育つことを保障できるよう、どんな環境にあっても子供が育つよう、国や自治体が役割を果たしていくことが重要。
- ・母になる身体について、また、リプロダクティブ・ライツに関わる部分という意味で、健康、権利の保障をしていくことが「母子健康手帳」の「母」の部分に含まれていると思う。一方で、子供が育つ権利を考えると、当然ながら父親が育児に主体的に関わることも重要である。いろいろな家族が登場する中で、両親がそろって当たり前みたいな価値観も多様化するかもしれない。

### ○母子健康手帳の電子化について

- ・世代に合った適切なメディアをうまく活用するということであり、電子化が目的ではない。これからの母親世代はスマホ一択となっている。ターゲットとなる人が使っている媒体をよく研究することが重要。
- ・電子化について、市民がその電子的なものを監視できるような指針が必要ではないか。
- ・女子学生に、アプリを使いこなすから母子健康手帳はアプリでいいのではと聞くと、アプリも欲しいが手帳も欲しいという意見が多かった。学生は、アプリは携帯電話で活用することとなるので、自分が携帯電話を触れない時に誰がロックを解除するのかという問題や、携帯電話は充電がすぐに切れるという問題があり、万全に使えるものだと思っていなかった。かわいい手帳を持っていたいというほのぼのした感覚もあるようだった。

- ・母子健康手帳は、シンボルであるとともに、まさに、健康に育つ、あるいは、産むこと、育てることのツール。専門的知識を持っている方々が、医学的、医療的、ケアの、発達の、心の、社会の問題も含めて、丁寧に伝えるツールとしての役割がある。アプリは社会資源や文化資源の情報をアップデートしていくために有効だが、その象徴として紙の母子健康手帳は重要ではないか。

#### ○母子健康手帳の内容について

- ・「両親学級」という文言について、もちろん父親の参画は重要だが、それが強制にならないようにする必要がある。例えば、出産前の教室の参加については、手帳に父親欄と母親欄をつくる等、丁寧にやっていかなければならないのではないか。多様な家庭に配慮していく時代であり「母親」「両親」のような親の表現も配慮が必要ではないか。
- ・メンタルヘルスが心配な時代になっている。特にコロナ禍で産後うつが増えていると実感している。貧血等の体調が悪い母親も非常に多い。手帳の項目に、子どもの健康だけでなく母親の健康をチェックする内容を、出産後2～3か月以降にもつくる必要がある。相談先の情報も併せて掲載すると安心だと思う。

#### ○多様性への対応について

- ・価値の多様化の時代には、育つ主体の子供そのものの権利保障を大事にすることを考えなければならない。

#### ○乳幼児健診や妊産婦健診等のあり方について

- ・乳幼児健診の中で就学時健診を受診しない児童を把握することはできないわけだから、「就学時健診を受診しない児童を把握することが重要」という記載に違和感がある。伝えたいことはイメージできるが、この文脈は違うのではないか。
- ・乳幼児健診から未受診の家庭では、兄弟が就学時健診に行っていない等の状況を把握したり、相談を受けたりということがあった。乳幼児健診は、単に身体診察だけではなく、家庭的に支援が必要な人を把握する上でもすごく大事なもので、個別の健診よりは、集団健診で保健師が見るところが重要と考えている。

#### ○その他

- ・意見（案）は、両論併記で適切なまとめ方をしている。アンダーラインの記載は、母子健康手帳の検討会委員に心理的な影響を与える可能性があるので不要ではないか。
- ・妊娠中の学びにより産後の子育てが違ってくると感じている。北欧では夫婦で参加する形で10回程産前講座を実施していると聞いている。母子健康手帳の検討会では、母子健康手帳も見直しつつ、妊娠中の講座や、伝え方、学ぶ内容を併せて立体的に検討いただきたい。

- この議論の中の妊産婦サポーターとして「助産師」という言葉がほとんど出てこない。妊娠・出産あるいはその前から産後しばらくは助産師のテリトリーで、お産を取り上げるのは医師か助産師であり、助産師はスペシャリスト。保健師ももちろん広範囲で大事だが、助産師の活用をもう少しどこかに入れられないか。
- 当事者のために政策はある。この母子健康手帳の場合、生まれる前の親、これは、父親、母親、いろいろな親がいるが、親のため、生まれたら、親子、子供のためであり、当事者のためにあるというところを再点検しながら、10年の見直しを行う必要がある。